

▽「親鸞聖人を語る夕べ」・会館報恩講開催

去る十一月二十五日午後七時より西本願寺高岡会館において「親鸞聖人を語る夕べ」が開催された。

このつどいは翌日の西本願寺高岡会館報恩講のお初夜として開催されるもの。今年も新型コロナウイルス感染症への対策としてお斎接待やコーラスは中止となった中での開催であった。

はじめに教化団体代表者による献灯献花ののち教務所長導師のもと、正信偈草譜六首引きをお勤めし、その後講師の巢山一哉さん（富山教区富山南組圓福寺住職）より「なぜ親鸞聖人の教えは広まったのか」という講題でお話をいただいた。巢山さんは、かつての日本仏教では身分や性別が重視され、一般庶民や男性に比べて罪が深く重いとされた女性は救済の対象外であったが、身分や性別に関係なく誰もが等しく救われていく教えが本当の仏教であり念仏の教えであるということを明らかにされた方が親鸞聖人であったとされた。当時の仏教や社会の常識とあまりにも異なる



る教えであったため迫害や弾圧を受け、親鸞聖人は在世時にはほとんど無名の存在であり、専修念仏の教えも禁止されていたが、一般庶民を中心に相当な広がりを見せており、特に女性が活躍していたことが当時の資料から明らかになっていることをお話しいただいた。

また、翌二十六日には西本願寺高岡会館報恩講が勤修され、各講社の講員を中心に八十名近いお参りがあり、親鸞聖人の遺徳を偲んだ。講師の津山玄亮さん（糸岡組願称寺住職）のご法話では、世界各国を対象として行われた「他人をどれだけ信用するか」という意識調査では日本は最下位であり、それ以外の対人関係に関する調査でも総じて日本は順位が低いことを挙げられ、日本社会がより閉鎖的に、人と人のつながりが絶たれていっていることを指摘された。その上で、ゴリラの社会には争いが一切なく、高度な社会性を持っていることを例にされ、それほど高度な社会性を持ちながらもゴリラが進歩や発展をせず、アフリカから生息地が広がらなかったのは、グループ以外のよそ者を一切受け入れないという性質のためであり、逆に同じアフリカにしかない人種が世界各地へと移動し発展していったのは、自分たちのグループ以外の者も受け入れ、自分たちにはない技術や知識、考え方などを取り入れていくことができたからだと言われた。互いの関わりや支えによって生きているのが人間であり、仏教はそのことの大事さや尊さを私たちに伝えようと言われているとお話された。

▽中央教修者のつどい開催

去る十二月四日、西本願寺高岡会館礼拝堂において門徒推進員を対象に「中央教修了者のつどい」が開催された。

今回のテーマは組・所属組織実践運動研修会と同一の「新型コロナウイルス感染症流行下の組・寺院活動」『大切にすべきもの』と「改めていくべきもの」を考える」とし、同朋企画専門委員より島高志さん（講師A 同朋企画専門委員 新湊組門徒推進員世話役）林史樹さん（講師B 同朋企画専門委員会副委員長 伏木組要願寺住職）の二名の講師が出向され、教区内全寺院を対象に取った「新型コロナウイルス感染症の流行に伴う寺院活動アンケート」をもとに研修を行った。

はじめに講師Aの島高志さんより問題提起があり、新型コロナウイルス感染症の流行により格差の拡大や虐待が増加し、差別や排除による社会の分断が進む中で「改めていくべきもの」とは、社会苦や社会不安が増大している今こそ寺院・僧侶の活躍する場であり、そのためには停滞している連研の再活性化や僧侶研修会などの社会問題をテーマとした活動や研修に取り組んでいくことが必要不可欠ではないかと提起された。また「大切にしていきたいもの」としては報恩講や祠堂経、法座活動の結果としてきた意義は大きく、今後も継続・存続のために努力していくべき活動ではないかとされた。

問題提起を受けた話し合い法座では、「ほとんどの行事が中止となつているが、門徒も高齢化している中で、単純に行事を中止するだけの対応ではこの後一挙に空洞化が進むのでは」「門徒からの集金も少なくなつてほしい」「教化団体の行事であっても、住職の判断で中止になる」「寺院は生きている人が対象なのか、死者への儀礼が主体なのか、本来の寺院の

あり方についてもっと考えて欲しい」等の意見が聞かれた。

助言では講師Bの林史樹さんより、新型コロナウイルス感染症の流行によつて、より弱い立場の人にしわ寄せが行っている現状があるが、格差にしろ虐待にしろ実は元々あった問題が顕在化しているに過ぎないとされ、寺院を取り巻く問題についても「以前からあった流れが加速化」「簡略化の流れは今後も戻らないのでは」とアンケートに回答している僧侶が一定数いることを指摘された。

また、寺院によつては経済的な基盤が維持できなくなつているところもあるが、意見でも出ていたように門徒側にも相当な負担になつていたのではとされた。その上で、簡略化や合理化は門徒側も僧侶側も望んでいた一面もあり、寺院活動についても変化していく中でこれから何を大切にしろを改めていくべきかを考えないといけないと提起された。

そして今後の課題として、①寺院行事における意思決定の手順は重要であり、住職や寺族だけで決定してしまうと門徒の参画意識が低下していくこと、②アンケートの結果によると寺院が一番関心があるのは門徒との今までの関係やつながりを維持・取り戻していくことにあり、ヤスクニ問題や差別問題等の問題に取り組むとの回答数は最低であるが、そもそも寺院は何のためにあるのか、足元から見直していく必要があるという二点を挙げられた。その上で、何を大切に、何を改めていくべきかを考えていく上で門徒との対話が何より重要であり、その大きな役割を担っているのが門徒推進員であるとされた。

※教区報十一月の訂正について

教区報十一月号中の常例法座のご案内にて、十二月講師の山名一徳さんのご講題については、未定としておりましたが、正しくは「慈と悲」でありました。ここに訂正し、謹んでお詫び申し上げます。

◇御同朋の社会をめざす運動のコーナー

「ビハーラ高岡」公開講座に参加して

十二月三日、「新型コロナウイルス感染症によって気づかされたこと」変わりゆく「家族」のかたち」をテーマに公開講座が開催されました。講師に高岡DV被害者自立支援基金パサパ代表の沙魚川万紀子さんを招き、新型コロナウイルス感染症の流行によって私たちの社会や人間関係にどのような影響がもたらされたのかについて、「家族」のあり方に焦点をあてて考える講座となりました。

講演では、DV（ドメスティックバイオレンス・パートナー関係に起きる暴力）が夫婦間のみならず家族間でも発生し、機能不全家庭（家庭内に対立、不法行為、身体的・性的・精神的虐待等が恒常的に存在する状態）を形成する大きな要因となっていること。児童虐待や高齢者虐待などを含むDVは密閉された家庭内で起こることが指摘されました。これらの問題の背景には暴力を容認する社会があり、自分らしさを見失い、相手を容認しない私たちのあり方や暴力が人権侵害であることを理解できない状況が深く関わっていると解説されました。講演を聞いて、このような問題はどのような一般家庭にもある程度存在するであろうと考えました。さらにはコロナ下であるために経済的困窮、生活スタイルの変化も加わり、家庭内が安心安全な場ではないことに悩み苦しむ人が増えたのではないかと危惧しました。また、新型コロナウイルス感染症の流行は「家族の今とあり方」を改めてクローズアップさせたとも感じました。

意見交換会では、家族の問題を家族内で解決するだけでなく、信頼し心を許せる第三者（友人等）の協力を得て苦しみを緩和できた体験や、悩んでいる人へのアプローチの方法などが提言されました。過去に行われた研修会においても、講師（カウンセラーとして活動する方）から「あなたたち僧侶こそが優秀なカウンセラーの役目を果たせるはずであり、何気ない日常の出来事の中で、相手を観察しすぐに手を差し伸べることが出来るのではないか」と助言をいただくことがありました。実際に僧侶として法務をしている私ですが、苦しい立場

に生きる方からみて、心許せる信頼できる私であるのだろうかと自問しました。

「ビハーラ高岡」では「生・老・病・死」をめぐる問題を明らかにし、いのちの関係性（つながり）を取り戻すことを考えた活動をめざしてきました。人生の終末期における看取り、その方への寄り添いを中心に学びを深め、近年では心の不安が死のみならず、現代社会で起こるあらゆる「生きづらさ」にあることにも注目して、様々な社会問題を知り考える研修も行っています。しかし、『ビハーラ』という概念がわかりにくい、「医療・福祉現場にかかわる必要性の是非がわからない」という意見や、「僧侶の生き方そのものがビハーラの理念に基づくはずなのに、あえて『ビハーラ活動』とするのはおかしい」という声も聞かれます。ビハーラの理念が病院や福祉の現場で意義をもつことは理解されることと考えますが、いの中の尊厳を守り寄り添うとするならば、活動の場所がどこであるかではなく、今この私の傍にいる人の苦しみに寄り添えるかを第一義に考えたビハーラ実践から始めるしかないと考えます。「ビハーラ活動」と名付けられているのは、この活動が僧侶だけではなく、門信徒や専門家と共に進める実践であるからではないでしょうか。沙魚川さんが「暴力のない、暴力を容認しない社会の実現をめざしたい」と明言されることに共感するとともに、私たち僧侶には、世の中にある無意識の偏見（アンコンシャスバイアス）を取り除き、人々が自ら考える力と相手を容認する力を養うことを社会に広める役目があるのだと理解しました。

これからも「ビハーラ高岡」では、多様化する社会の中で、人生を生き切るための拠り所となる人、場所との出会いが失われないよう、悩み孤独のなかにいる人に寄り添い、一人にはさせないことに重きをおいた活動を大切にしていきます。今回の公開講座で明らかになった課題を私自身に照らし合わせ、一人でも多くの仲間と学びを共有し、一歩でも前に踏み出す実践を進めていきたいと思えます。

【「ビハーラ高岡」常任委員・水波組 西光寺 寺野薫】

◇これからの日程（12/14～1/30）◇

12月	教区・財団行事	教化団体・組行事
14	常例法座	
16		広報委員会
17	総代会常任幹事会	
19		寺青実践運動研修会
21		少年連盟役員会
22	教務所長会（web）	
23		解放連講演会
24	組長会	
28	事務終了	
<p>12月28日の午後より、1月10日まで、教務所事務休業いたします。</p>		
1月		
11	事務開始	
14	常例法座	1月14日～16日まで、親鸞聖人御正忌報恩講のため教務所事務を休業いたします。（常例法座はございません）
17	僧侶研修会1回目	
22		まことの保育研修会
28	僧侶研修会2回目	
29	僧侶研修会3回目	
30		仏壮研修会

☆お知らせ☆

『法輪せんべい』販売について

お茶菓子やご法事・ご法座の折のお扱いにいかがでしょうか。お申し込み先は下記のとおり。

FAX. でのお申し込みも承ります。どうぞご利用下さい。
一袋二枚入りで価格は次の通り

・特大箱（170袋） 10,000円

・1組（10袋） 600円

お申込み先は・・・高岡市東上関446 高岡教務所内
（寺族青年会担当）

Tel. (050) 5587-7708(代表)

メール hourin18@gmail.com

ラジオ放送～西本願寺の時間～

『みほとけとともに』

北日本放送（KNB）・738kHz.

◎毎週土曜日（本山制作） 午前5:35～5:45

□第2・4日曜日（富山・高岡制作） 午前6:00～6:10

◎12/25（土）：徂徠さん一人喋り

（奈良教区西光寺坊守）

「2021年を振り返って」

◎1/1（土）：石上 智康総長

（浄土真宗本願寺派総長）

「年頭のあいさつ」

◎1/8（土）：池本 史雅氏

（本願寺派布教使・兵庫教区姫路中組法性寺衆徒）

「お西さんを知ろう！を通して」

□1/9（日）：未 定

（富山教区）

◎1/15（土）：池本 史雅氏

（本願寺派布教使・兵庫教区姫路中組法性寺衆徒）

「南無阿弥陀仏の声の仏さま」

◎1/22（土）：正親 一宣氏

（本願寺派布教使・東海教区中勢組正覚寺住職）

「特等席」

◎1/29（土）：正親 一宣氏

（本願寺派布教使・東海教区中勢組正覚寺住職）

「阿弥陀様の喚び声」

【西本願寺高岡会館1月の常例法座】

ご講師： 岡西有可氏

（高岡教区五位組教願寺）

ご講題：『南無阿弥陀仏のおこころ』

午後1時20分頃からビデオ上映、2時からお正信偈六首引のお勤めです。どうぞお誘いあわせてお参りください。